
とある科学の超電磁砲？

阪神虎之介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の超電磁砲？

【Nコード】

N4207X

【作者名】

阪神虎之介

【あらすじ】

学園都市で過ごす風紀委員の物語

ギャクあり、シリアスありなど作者が遊び感覚で楽しく書いています。

尚、場合によっては原作キャラの死亡がありますのでご了承ください。

THE・プロローグ（前書き）

始まり〜始まり〜

THE・プロローグ

東京の西部を開拓しイロイロな研究所がそこにぶち込んだ結果、世界有数の科学都市が生まれた。

人はその名を「学園都市」と呼んだ。

チンピラ「なんなんや！この女！ホンマに人間か！」

チンピラはある女と対決していた。

それにチンピラ達が絡んだがその女が強く、10人程いた方達ですでに1人になっていた。

チンピラ「男として負けたらあかん、只でさえ男性の地位が下がってるのに俺達がこんな小生意気なガキに負けたらさらにアカン」

この女「どうしたのよ、早くかかってきなさい」

「この女」は頭から電撃見たいなのを繰り返した。

チンピラ「前言撤回、逃げる」

チンピラは逃げ出した。

チンピラ「あゝもゝツいてない！金貰おうと思って絡んだねえちゃんがあるじゃとてもやってられんわ」

チンピラは路地を走り回るが

チンピラ「へ？」

【ゴッ！】

チンピラ「ギャ！」

ツインテールのピンクの髪をした背の小さい女の子「『風紀委員』です、暴行未遂の現行犯で拘束しますの」

チンピラ「イダイイダイイダイイダイイダイイダイイダイ！
！」

ツインテールのピンクの髪をした背の小さい女の子「おとなしく観念してくださいな」

チンピラ「するするするするする！！！」

ツインテールのピンクの髪をした背の小さい女の子「さもないと腕をへし折りますわよ？」

チンピラ「話聞いてる！？観念してるがな！？アダダダダ！！！」

ツインテールのピンクの髪をした背の小さい女の子「確保！…さて
っと」

ツインテールのピンクの髪をした背の小さい女の子はチンピラに手錠をかけると路地にいる「この女」に声をかけた。

ツインテールのピンクの髪をした背の小さい女の子「風紀委員ですのーそちらの方大丈夫ですか？今助けにー」

そう言った瞬間、「この女」は後ろを振り返り、一言。

この女「あ！黒子」

ツインテールのピンクの髪をした背の小さい女の子もとい黒子「…通報にあった路地裏に連れ込まされた女性というのは、お姉様の事でしたの…」

この女もといお姉様「どーしたの？」

THE・プロローグ（後書き）

次からオリ主初登場

THE・オリ主（前書き）

オリ主初登場

THE・オリ主

ここは柵川中学校、ごくごくありふれた学園都市の中学校である。

全校生徒は勿論「学園都市能力検定」をやり、自分の能力と級がわかってる。

まあそれはどの学園都市の学校もそうだけど

一年生の教室にて

男？「ZZZZZZZ」

女？「ZZZZZZZ」

二人の男女が気持ちよく寝ていた。

先生「……………（怒）」

勿論、先生は黙って二人の事を見つめてる。

男？「オイ、起きろや」

女？「佐天さん起きてください」

女？もとい初春飾利は女？もとい佐天涙子を起こそうと試みる。

佐天「うゝん…」

起きる気配はない。

男？「おい、起きんか！起きろよ…起きないな」

この初春と違い、更々起こす気が無い男、桜井広はぐっすり寝てる男、熊谷雅布くまがいまさのぶを教科書で殴った。

雅布「グハア!？」

雅布は起きた。

雅布は辺りを見回すと…

雅布「おい桜井起きろ」

桜井「起きとるわ」

先生「おい佐天早く起きろ」

佐天は勢い良く起き上がり…

佐天「え、あ…すみません!」

先生「二人共廊下に立ってろ!」

佐天「はー「ヤダ」い」

先生「熊谷!何がやなんだ!言って見ろ!」

雅布「だって寝てただけですよ!？」

先生「能力に関する重要な授業だ!寝るなんて言語道断!廊下に立つとけ!」

雅布「俺レベル4なんですけど!？」

先生「関係あるのか!?レベル5目指さないのか!？」

雅布「はい!！」

桜井「堂々ということか…」

さすがの先生も

先生「ふざけんな!立ってろ!」

雅布「へい」

先生「ったく」

結果的に雅布は風紀委員じゃ異例の学年指導を受けるハメになった。

桜井「雅布って風紀委員だったんだ…」

初春「あまり認めたくないですけどね…」

・
・
・
・

・ ・ ・ ・
「風紀委員第177支部にて」

そこにはデスクワークをやっている初春と始末書を書いている白井黒子とスナック菓子を頬張り昨日の阪神の結果を眺めている雅布がいた。

雅布「昨日は広島に3ー1か：鳥谷5号2ラン：岩田の完投か：」

黒子「雅布もちゃんと風紀委員としての自覚を持って欲しいのですの、最近雅布の仕事にはやる気が感じられないですの」

雅布「だって風紀委員って学校内だけじゃん」

初春「それはそうでそうけど：学校内以外の事件を取り扱うのは基本的に『警備員』の仕事ですし：」

雅布「白井みたいになさ、学校外でも暴れる奴が普通だと思うけど：」

個法「デスクワークも普通の風紀委員の仕事も大事な事よ」

雅布「いきなりなんですか！？」

この「アンタ誰だよ！？」「見たいな感じで話の中に乱入してきた方は個法先輩

え？「個法先輩」じゃなくて本名で書けと？

じゃ名前教えろや!!!

個法「昨日の阪神はもういいからさっさと雅布は巡回してきて、黒子は第7学区で起こった『学舎の園の生徒襲撃事件』の調査を」

雅布「それどう考えても犯人変態だよな…バカだろ…」

個法「雅布!!!!」

雅布「ヘイヘーイ」

こいつの名は「風紀委員のうつけ者」熊谷雅布

そいつの詳細はまた何処で…

THE・オリ主（後書き）

次回は人物紹介です。

あと個法先輩の名前、ガチで知らないんで知ってる人教えてくれい

THE・登場人物紹介 熊谷雅布 and 桜井広（前書き）

二人ただす

THE・登場人物紹介 熊谷雅布 and 桜井広

熊谷雅布くまがいまゆのぶ：柵川中学に通う一年。一応この作品の主人公、レベル4で黒子と同じ能力と言う稀に見る同一能力の持ち主。上に二人兄がいるが、出すからそんな時で。合気道、柔道など格闘術に長けていることから風紀委員からスカウトされ入ったのはいいがその結果「風紀委員の両さん」や「うつけ者」と呼ばれるハメに…
大の阪神ファンである。

桜井広さくらいひろし：雅布と同じく柵川中学一年。レベル2の電磁を扱う能力だったと彼は語る。雅布とコンビを組んでいる。実は風紀委員なのだが：雅布曰わく「風紀委員の鬼」

THE・登場人物紹介 熊谷雅布 and 桜井広（後書き）

「こちら葛飾区亀有公園前派出所」に触れた所はありますが、「こちら葛飾区亀有公園前派出所」は原作じゃないので、いい例えが見つからなかったの…

THE・熊谷雅布 and 御坂美琴（前書き）

二人が初めて出会います。

THE・熊谷雅布 and 御坂美琴

その日私、熊谷雅布は個法美偉先輩に頼まれ第160支部まで行ってよくわからない試験管をよくわからない施設によくわからない車で行った後、徒歩で自分の家（柵川中学校男子寮）に戻ろうとした。

雅布「何だったんだろうな？あの液体？」

私はあの試験管に入ってた液体が異様に気になっていたが、その後3分で忘れた。

私はあるコンビニに立ち寄った。

飲み物と漫画が買いたくなっただけである。

雅布「このコンビニ立ち読みが出来るんか」

私はこのコンビニが立ち読みできると知ってたいそう驚いた。

雅布「で、何でこんなしわくちゃんになってんだ？」

私はコンビニの漫画が全部独特な形でしわくちゃんになっている。

明らかに同一犯の仕業だ：

まあどうせ近くのチンピラか小学生かなと言う気持ちで私は唯一しわくちゃんになっていない「週刊ベースボール」を眺めた。

学園都市でも週刊ベースボールは売っている。

今週は【捕手の哲学】という記事だ。

ヤクルトの相川、阪神の城島、千葉ロッテの里崎と各チームの捕手の記事がワンサカと掲載されている。

私が週べに没頭してると：

「あ、新しくなってる」

ある女子の声でした。

雅布は週べを読みながら横目でその女子を見た。

その女子は黒子と同じ制服を来ていた。

雅布（あれって確か白井と同じ制服だよな…じゃ同じ学校か…あれ？白井って『学舎の園』の生徒じゃなかったけ？なんでそんなリッチマンがこんな場所にいるんだ？）

雅布はそう考えているとその女子は立ち読みし始めた。

雅布（こんな女子も立ち読みするんだな）

そんな事考えてると雅布はあることに気がついた！

雅布（コイツ…本の隅っこを手でこすりつけてる！）

雅布はこんな高貴な女子も立ち読みをしてしわくちゃんにして店員に嫌がらせするんだなあ〜と感じたとか

店員（立ち読みはやめてくれい（泣））

（御坂視点）

私がコンビニに新刊見にきたらちようど私と同じくらいの人が立ち読みしていた。

「風紀委員」の紋章をしてたから風紀委員なんだ

しかも胸バッチに「第177愚連隊」って書いてある…黒子と同じ支部なのかな？

雰囲気が近寄りたがくちよつと間を空けて立ち読みしていた。

するとその愚連隊の人が私の事をチラチラ見てる。

恐らく「常盤台のお嬢様だ」とか変な事考えてるんでしょ…

そんなのお見通しよ

（雅布視点）

アレどこの制服だっけ？「長点上機学園」だっけ？

あそこは黒か…

「桜ヶ丘高校」だっけ？

あれは別の作品だ…

「常盤平中学校」だっけ？

それは和田コーチの出身中学だ：

そうだ！「常盤台中学」だ！

御坂の「常盤台のお嬢様」より程遠い雅布の思考だった。

THE・熊谷雅布 and 御坂美琴（後書き）

恋愛？なったら凄いな（笑）

こちら風紀委員第177愚連隊隊長の熊谷雅布です（前書き）

「THE」が付かなくなりました。

こちら風紀委員第177愚連隊隊長の熊谷雅布です

立ち読み女の子御坂は新刊の立ち読みが終わった後、何も買わずにコンビニを後にした。

風紀委員第177愚連隊の雅布は週刊ベースボールとサイダーを購入し、コンビニを後にした。

その後白井黒子宛にメールで

「常盤台に立ち読み女の子っている？」

・ ・ ・ ・

雅布はある路地裏に入った。

そこにはさっき会った「立ち読み女の子」がいた。

その「立ち読み女の子」の周りにピアスや五輪刈り等をした不良共がいた。

雅布（なんだい？「立ち読み女の子」は立ち読みだけじゃなく軍団でも作ってんのかい？本当にコイツ常盤台か？）

そう雅布は考えてるいたが：

不良達の身ぶり手ぶり等で「絡まれんじゃねえの？」と彼は予測した。

なんか「立ち読み女の子」の戦闘力は強そうであんなチンピラなんかひと捻りかな？と考えたが。

雅布（ここは風紀委員の仕事をやろう）

そう言って雅布は不良達に近づいていった。

雅布「えー、風紀委員の者です。オマイラ何やってんだ？」

不良？「んだテメエは？」

不良？「風紀委員かあ？」

雅布「風紀委員だけど？そこでさあ〜カットアゲとかされちゃ困るんだよ？やるなら違う場所でやって？せめてトイレでやって」

御坂（え？助けないの？）

不良？「ウザいんだよ風紀委員は！！！」

雅布「人の話聞けやバカかお前は！？」

不良？「死ねえゴラァ！」

不良？は雅布に殴りかかった！

雅布は軽く避けると相手の腹にカウンターを喰らわした。

不良？「グフウ…」

不良？は倒れ込んだ。

不良？「この野郎！」

不良？がナイフを取り出して雅布に切りかかる！

御坂（危ない！）

不良？「グハァ！！」

御坂「え？」

雅布は不良？が繰り出したナイフを持ってる左手を掴んで手首を捻りナイフをもぎ取ると足を引っ掛け、転倒させた。

雅布「まったく大人しく事情聴取に応答すればいいものを…結果、お前らは『公務執行妨害』をやり、お縄に捕まる…バカじゃねえの？」

そう言いつつ雅布は不良達に手錠をかけてゆく

不良？「畜生！なんで風紀委員が来たんだよ！風紀委員は学校だけだろ！活動が！」

雅布「こういうところで検挙率をあげていると学歴に良い印象を与えるんだよ、それに俺は白井黒子見たいに無闇やたらに能力など使わん、能力なんて使ったら業務に響くからなく、こういう『公務執行妨害による正当防衛』なら良いんだよ、管轄外だが…」

不良？「お前本当に風紀委員なのか？この前あった風紀委員は『そう言う事していいんですか？』とかいう超超クソ真面目な奴だった
が」

雅布「いやいや、俺はそう言う奴じゃないから」

不良？「そう言われると風紀委員も悪くは無さそうだな」

雅布「最初の頃は研修とかで格闘技覚えさせられるから喧嘩にも強くなれるよ」

不良？「考えとく」

雅布「いいけどさ、とりあえず一緒に風紀委員に行こうか、逮捕しちゃったんだから聴取とらねえんといけないんだわ」

御坂「それって私も来なきゃいけない？」

雅布「勿論」

こうして雅布は風紀委員第177支部に行ったとき

（白井と初春は仕事の関係で雅布、御坂と会わず）

こちら風紀委員第177愚連隊隊長の熊谷雅布です（後書き）

次は「白球夢見て」の方をちょっと書くん

でそちらもよろしくお願いします。

レストラン（前書き）

桜井広、久々の登場

レストラン

その日雅布は桜井広とあるレストランにいた。

桜井はアイスティーを注文して本を読みながらゆっくり飲んでいたが雅布はドリンクバーの烏龍茶を飲み干した後、机に突っ伏して寝ていた。

桜井（……………ん？）

するとあることに気がついた桜井は持ってた本で雅布をたたき起こした。

雅布「いった！なにすんねん！」

桜井「あれ黒子じゃね？」

そう言って桜井が指差す方を雅布が見ると、確かに窓側の方に白井黒子と前話で出た「立ち読み女の子」がいた。

雅布「やっぱり白井と知り合いか…どうりで先日やたらソワソワしてると思った…」

桜井「黒子と一緒にいる奴知ってるのか？」

雅布「ああ、『常盤台の超電磁砲』でお馴染みの御坂美琴様よ、先日不良に襲われている所を俺が救出、調書を取ってる時に『常盤台の超電磁砲』って分かった訳よ」

桜井「じゃ黒子の先輩か」

雅布「しかし白井の奴なにやってんだ？アイツ今日仕事のはずだぞ？」

桜井「俺達もじゃね？」

雅布「俺達はいいの、今日は『パトロールを自主的にやれ』との支持だ」

桜井「最近俺達の仕事おかしくないか？今日のソレといい、先日の謎の液体を運ぶとか」

雅布「あれ俺だけじゃなくて白井も初春もやらされたらしいじゃん？何なんだアレ？」

桜井「俺はその液体を見てないから知らん」

雅布（確かに気になるな…）

白井「オネエエサマアア！！」

雅布・桜井「！！？」

※知ってる人は知ってると思うが、白井黒子はいきなり御坂美琴に抱きついた。

雅布「やはりあのアマ、レズか…」

桜井「レズか…」

雅布「手塚治虫の『MW』って言う漫画に同性愛の事書いてあるべ」

桜井「それ確か映画化した奴だよね？」

雅布「まあ手塚治虫は『火の鳥』とか『ブラックジャック』とかシリ阿斯な物も書いてあるから」

雅布と桜井が手塚治虫について語っていると白井と御坂はレストランから追い出された。

それを見た雅布と桜井もレストランから出たのであった。

レストランを出て右側を見ると白井と御坂と初春と佐天がいた。

雅布「あれ初春ちゃん、えーと隣にるのが…」

桜井「佐藤」

雅布「そうそう佐藤、佐藤」

雅布（確かに気になるな…）

白井「オネエエサマアア！！」

雅布・桜井「！！？」

※知ってる人は知ってると思うが、白井黒子はいきなり御坂美琴に抱きついた。

雅布「やはりあのアマ、レズか…」

桜井「レズか…」

雅布「手塚治虫の『MW』って言う漫画に同性愛の事書いてあるべ」

桜井「それ確か映画化した奴だよね？」

雅布「まあ手塚治虫は『火の鳥』とか『ブラックジャック』とかシリ阿斯な物も書いてあるから」

雅布と桜井が手塚治虫について語っていると白井と御坂はレストランから追い出された。

それを見た雅布と桜井もレストランから出たのであった。

レストランから出て右側を見ると白井と御坂と初春と佐天がいた。

気にせずその場を通り過ぎようとしたら

【ゴン！！】

雅布「？」

何かに当たった衝撃を感じたので下を見ると

白井黒子の頭を蹴っていた。

雅布「何そこで呑気に寝てんねん、蹴られたいのか？」

そう言つて雅布は執拗に白井黒子を蹴る。

初春「なんで雅布さんがいるんですか？」

雅布「何だよそれ、いたら邪魔見たいな言い方は？」

レストラン（後書き）

感想お待ちしております！

銀行強盗

とりあえず話に割り込んだんで雅布と桜井は御坂に自己紹介した。

雅布「柵川中学に通う初春と佐藤の同級生の熊谷雅布です。」

桜井「同じく同級生の桜井広」

御坂「私は御坂美琴…ってアナタは知ってるのよね…」

そう言っつて御坂は雅布に目を向けた

白井「え…お姉様どこでこんな野蛮人と…」

雅布「先日コイツが不良達に囲まれていてさ、まあ色々あって止めたわけだ。んで被害者のコイツの調書を取っただけだ」

白井「そうですの」

初春「だけど雅布さん目上の人に『コイツ』は無いと思いますよ」

雅布「え？」

白井「そうですの雅布、お姉様は中学2年ですよ」

雅布「そうなの!？」

3人の身長の比

御坂く雅布く桜井

御坂「え？あなた中1だったの？」

雅布「じゃあ何歳だと思っていたんだ？」

御坂「高校生くらい？」

雅布「ケッ…」

雅布はそう吐き捨てると

雅布「さて俺らは警邏に行きますかあ」

桜井とどっか行ってしまった。

御坂「何なのアイツは？」

白井「申し訳ございませんお姉様、彼は凶体と見かけは野蛮人ですが性格は良い方なのです」

初春「白井さんの言うとおり雅布さんは良い人ですよ」

佐天「私の事を佐藤とか言っただけ…」

初春「知らなかっただけだと思います」

雅布と桜井はある広場に着いた。

雅布「あゝ、ダリィ」

桜井「アイスでも食おうぜ」

雅布「そうだな」

そう言って雅布と桜井は色々な所で暇つぶしをした。

そうこうしてると

【ズガン！！】

いきなり爆発音が聞こえた。

雅布・桜井「？」

雅布と桜井が爆発音のする方を見ると

近くの銀行から煙が出ていた。

雅布「銀行強盗かな？」

そう言うとき銀行の中から

？「よっしゃ引き上げるぞ！」

？、？「ヘイ！」

雅布はテレポートを使い犯人達の所へ行った。

【シュン！】

雅布「つーかまーえた！」

？「ギャアアア！」

・ ・ ・ ・ ・

桜井「やっぱりあれだよな、お前の捕まえ方は危ないよ」

雅布「そう？」

銀行強盗（後書き）

白井「私達の出番が取られたのですの」

御坂「そうね…」

登場人物紹介その？御坂、白井、初春、佐天、個法編（前書き）

超簡単に

登場人物紹介その？御坂、白井、初春、佐天、個法編

御坂美琴…「超電磁砲」をぶっ放すお嬢様として広くその名が知られている。原作だったら前話で超電磁砲をぶっ放す予定だったが雅布により出番無しに追い込まれた。

上条×御坂は筆者は考えてないとの事。

白井黒子…レズ。いつも御坂に取り付いているため風紀委員の間じゃ「百合の黒子」とか呼ばれる。コイツも雅布により出番無しに追い込まれる。

初春飾利…只でさえ「阪神ファンのタイガース日記」の出番が無くなっているのにこっちじゃ白井黒子以上に出してない気がする。

佐天涙子…雅布に「佐藤」と呼ばれる。存在感出してるように見えるが雅布には認識されてない。

まだ2つぐらいしか台詞が無い。

個法美偉…筆者が「名前を覚えてなかった」人。

登場人物紹介その？御坂、白井、初春、佐天、個法編（後書き）

頻繁にやります。

液体の正体

銀行強盗事件が終わった日の夜

【カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカ】

雅布は自室でパソコンのワードを打っていた。

雅布「これで…よしと、後はこのビンを詰めて…」

雅布は自室の窓を開け

雅布「頼んだぞ」

ハト「クルツクー」

一匹のハトを飛ばした。

（東京・防衛省）

自衛隊等、日本の防衛を担当する省の地下に秘密結社じゃないがある組織が存在する。

基本的に一般人は知らなく、防衛省に通う人でも知らない人がいる。

その名を「防衛省情報局」通称「MDIS」と呼んだ。

局長「…しかしよく学園都市からこんな情報を持ってこれたな…」

雅之「幾ら学園都市でもまさか伝書鳩を飛ばしているとは思わなかったと思います」

彼の名は「熊谷雅之」

熊谷雅布の実兄である。

彼の表向きの顔は「陸上自衛隊の三佐」だがその正体は「防衛省情報局の職員」である。

普段はデスクワークだが実際現地にいくこともある。

局長「しかし…これが『アレ』だったら大変な事になるぞ…」

雅之「はい」

局長の机の上には以前、雅布が風紀委員の仕事で配送した「謎の液体」が置かれている。

雅之「調べた所、『GUSHO』に間違いのないとの事です」

局長「そうか…」

局長室に沈黙が流れる。

局長「それじゃ熊谷三佐は引き続き学園都市の調査にあたれ、GUSHOについてはこちらで配慮する」

雅之「了解」

・ ・ ・ ・ ・

雅布「何だと…」

雅布は返信の伝書鳩が持ってきた手紙を読んで愕然とした。

「液体の正体はGUSHO」

この一言で充分だった。

雅布はこの手紙を見た後すぐライターで燃やし、灰にした。

調査依頼（前書き）

あのグループが初登場です。

調査依頼

雅布は液体の正体がGUSHOだと知るとある場所に向かった。

そこは平凡なレストラン。

そこに入ると4人の女子がいた。

一人は目がつり上がり鮭弁食ってる

一人は映画雑誌を眺めてる。

一人はパフェを頬張っている金髪外人

一人は目を開けながら寝てる電波少女

暗部組織「アイテム」のメンバーだ。

鮭弁を頬張る隊長の麦野

B級映画が大好きな絹旗

一番弱そうだけど一番重要な滝壺

それと部下一名

フренда「忘れてる！忘れてる！自己紹介させて！」

なんか五月蠅い蠅がいるので作者権限で抹殺

フレンダ「ギャアアア!!」

……すると話しが続かないので

フレンダ「ホッ」

麦野「雅布か、何のようだ？」

雅布「依頼を頼みに来た」

絹旗「ぶっちゃけ雅布が持ってくる依頼は超不気味で嫌なんですよ」

滝壺「大丈夫、私はそんな雅布を応援する…」

雅布「いやいや、今回は簡単ですよ、何だって『ある研究所に行つてある資料を盗んでくる』だから」

麦野「なんで私らがそんなこそ泥見たいな事やらないといけないんだ!?!?!?!」

麦野はそう言うときを思い切り叩いた。

雅布「誰がこそ泥やれといった。方法は問わない、とりあえず俺は資料が欲しいだけだ」

絹旗「その資料はどんな資料なんですか？」

雅布「GUSHOっていう液体がある。それについての資料だ」

麦野「報酬は？」

麦野がそう言うと雅布は不敵な笑みを浮かべた。

調査依頼（後書き）

時期はアニメでいう「常盤台襲撃事件」の前後

アイテムのお仕事（前書き）

雅布は不敵な笑みを浮かべた。

雅布「鮭弁と鯖缶、映画雑誌でいい？」

アイテムのお仕事

くその日の夜く

麦野以下4人はある研究所にいた。

麦野「ここか…」

絹旗「超警備員がいますね」

※「アンチスキル」じゃなく「けいびいん」

フレンダ「ぶっちゃけ、こそ泥見たいな事をやるような連中じゃないのよ」

麦野「そう言うこと言わないのよ、さて…」

麦野はそう言うのと

麦野「じゃあ作戦実行よ♪」

そう言った瞬間、研究所のどこかで爆発音が聞こえた。

警備員？「なんだ！」

警備員？「敵襲か？」

警備員の慌てる声が聞こえる。

麦野「行くよ！」

4人は警備員の目を盗んで研究所の中に侵入した。

絹旗「しかし本当に超こそ泥ですね私達、しかも任務内容の中に『敵に正体がバレないように』なんて、だったら超テメエがやれって話です」

麦野「愚痴言わないのよ絹旗、その分報酬があるのだから」

絹旗「まあそうですけど…」

麦野（しかし確かに絹旗の言うとおり雅布自身がやれば成功率が高いのに…こんな地獄まであるんだから）

麦野はそう考えていた瞬間！

警備員「ん？」

アイテム「！！！！」

警備員「誰だ！？」

【ドス！】

警備員「キュウ…」

麦野「流石ね絹旗」

絹旗「超お茶の子さいさいです」

絹旗の蹴手繰りで警備員を倒した。

アイテムの面子はその後、監視室を襲撃し、研究所の監視システムは制覇した。

麦野「えーと、確かこの液体の部屋は…」

絹旗「ここだと思います」

麦野と滝壺が監視室に残り他の2人が麦野の指示の元、「液体」を探している。

麦野「今ロックを解除した」

絹旗「了解」

絹旗はポケットから拳銃を取り出すと、ゆっくり部屋に入っていた。

麦野「絹旗、右斜め前方に人がいる」

絹旗「了解」

監視カメラをいじりながら麦野が敵を探してそれを絹旗が処理する。

その時に絹旗は研究員に液体の所在を聞く。

そんなこんなで時間がたった時

【ズガン！】

突然、爆発音が聞こえた。

麦野「絹旗！どうした！？」

絹旗「分かりません！フレンドがいるほうから超聞こえました！」

麦野「フレンド！？」

すると無線でフレンドから連絡が入る。

フレンド「ヤバイよ！武装集団が突入してくる！」

麦野「武装集団？」

フレンドの無線の向こうからは激しい銃の音が聞こえた。

フレンド「とりあえず、今の場所からは逃げてる！麦野！逃げ場所ある！？」

麦野「ちょっと待て！！」

麦野は急いで地図を見てフレンドの位置を確認する。

同時にフレンドの追っ手を突き放すためにフレンドが通った後ろに防火シャッターを閉める。

フレンド「ありがとう麦野！」

麦野「フレンダ！このまま下に降りて行けば絹旗と合流できるから合流しろ！」

フレンダ「了解」

絹旗「分かりました」

・
・
・
・
・
・
・

絹旗「結局この液体は超何なんですかね？」

フレンダ「私達は知らなくていいことよ」

麦野「そういうこと」

アイテムはちゃんと「液体」の資料を強奪し、武装集団を退けて任務完了した。

アイテムのお仕事（後書き）

「けいおん！ ～白球夢見て～」を次回は書きます。

新キャラ登場（前書き）

すんげ〜短いです！

新キャラ登場

「アイテム」が研究所を襲撃してからの朝

麦野は第10学区のある路地にいた。

そこで麦野はある一人の男を待っていた。

その男がやってきた。

麦野「遅刻だ」

菊池「ワリイワリイ」

男の名は菊池^{きくちいさみ}勇

あるスキルアウトのリーダーである。

麦野は研究所から盗んだ書類を菊池に渡した。

菊池「これが『例の書類』ですかあゝ、分かりました。ちゃんと雅布に届けておくんで！」

そう言うのと菊池は去っていった。

麦野「はあ…」

麦野は溜め息をついた。

新キャラ登場（後書き）

次回から「レベルアップ編」に移ります。

けどこの話は終わってないんで

レベルアップアアアア!!!!!!その？

（風紀委員第177支部）

雅布は呑気に漫画を読んでいた。

雅布（あゝヒマだなあ…）

ちなみに白井達は仕事に出てる。

雅布は大人しくお留守番って訳。

雅布（GUSHOの件についてはMDISで調査中、結果が分かり次第動けとの事…）

今だから紹介するが雅布は雅之の命令でMDISの諜報員もやっている。

雅布（雅昭兄さんからも連絡来ないから凄いヒマ）

雅昭兄さんとはいつか出る。

つか登場人物紹介を見直すから詳細はそこで

そんな平和な時間を過ごしているときだった。

【PPPPP】

雅布の携帯が鳴った。

雅布「へい」

白井「雅布ですの？緊急事態発生のため至急来てくださいですの！
」ピッ

【ツウー、ツウー】

雅布「……………どこに？」

その後、初春からの連絡で雅布はある場所にいった。

雅布「こりゃすげーなおい！」

桜井「興奮して言うことじゃないと思うよ…」

雅布はあるお店にいた。

先ほどここで爆発騒ぎがあり、風紀委員一人が怪我をするという事態に…

雅布「で？なんで俺たちが？」

初春「177支部の仲間ですよ！やられたのは！」

桜井「へえ」

雅布「なに？白井がやられた？あゝあゝ、香典買いに行かないと…」

白井「死んでませんですの！」

雅布「なんだ…」 チッ

桜井・初春（今舌打ちしたよな…）

個法「あつ、雅布に桜井来た」

雅布「来ました」

個法「橋本は病院で治療を受けているけど命には別状は無いって」

雅布「橋本って誰？」

桜井「怪我した風紀委員」

雅布「あゝ、誰？」

桜井「知らないんかい…」

・
・
・
・
・

白井「というのが昨日の夕方に起こった事件ですの」

白井は御坂は公園の自販機にいた。

白井「聞いてます？お姉様」

御坂「聞いてるわよ、連続爆破事件とかいうやつでしょ」

白井「正確には連続虚空爆破事件ですの」

そう言っつて白井は御坂が買った（正確には蹴手繰りで購入）した缶を指差し

白井「アルミを基点にして、重力子の数ではなく速度を急激に増加させてそれを一気に周囲に撒き散らす、ようは『アルミを爆弾に変える』能力ですの。ぬいぐるみの中にスプーンを隠して破裂させたり、ゴミ箱のアルミ缶を爆破するといった手を使ってきましたの、爆発の前に前兆があるので死亡者こそ出ていませんが、まだ犯人の特定ができてませんの」

御坂「だったら能力者の犯行なんですよ？」

白井と御坂「連続爆破事件」について語っている時、雅布は…

雅布「レベルアップ？」

菊池「ああ、能力者のレベルを上げる道具だ」

菊池からレベルアップの事を聞いていた。

レベルアップアアアア！！！！！！！！！その？（前書き）

原作キャラ未登場

レベルアップアアアア!!!!!!その？

菊池「今はまだ都市伝説程度だが俺はもう少ししたら爆発的に流行
と思う。だから今の内にレベルアップのあるサイトから大量に
ダウンロードしとくんだよ（笑）」

雅布「そんな代物売れるのか？」

菊池「大丈夫！実証済みだ！既に10人にやらしてある」

雅布「……結果は？」

菊池「全員にレベル1→2の変化が表れた。」

雅布「なる程」

菊池「でもこんな代物、いつ風紀委員に取り上げられるか分からん」

雅布「アイツら頭固いからな」

菊池「そんな時にこれを1000円で売れば……」

雅布「…凄い金になるな」

ここは菊池の寮だがとんでもない量のダンボールがある。

雅布「いちよう聞ぐがこのダンボールの中にあるiPodはどこで
入手した？」

菊池「『外』の奴からスキルアウトを通じて届けてもらった！ちなみに全部中国製！i P d d！」

雅布「それどうやって発音するの？」

菊池「しかし裏の顔を持っている同士、何を考えているのか分からんなー！」

雅布「へっ、お前みたいになちっぽけな権力とは違うぜ！！」

菊池「じゃ何だ？C I Aか？」

雅布「……近いな」

菊池「え？」

雅布「あ、俺はこれで帰るから」

菊池「ああ、またな」

雅布「おう！」

雅布は菊池の部屋を後にした。

雅布「さて…」

雅布は菊池が「一個どうよ？」と言われて貰ったレベルアップを見た。

雅布はそれのある場所に持って行った。

・ ・ ・ ・ ・

雅布はある教会にいた。

と行っても十字教なんかじゃない

ちゃんとしたキリスト教の教会だ。

雅布「……やっと来たか」

雅昭「悪い悪い、不良に絡まれてさあ」

雅布「まさか使った訳じゃねえだろうな？」

雅昭「延髄切りですんだ」

雅布「ならよかった」

しばらくして

雅之「お待たせ」

雅昭「兄さん」

雅布「久しぶり」

雅之「本当に久しぶりだな、例の物は持ってきたか？」

雅昭「ああ、これだろ？」

雅昭はそう言うのと鞆を開けてあるものを出した。

雅布「兄さん、それ何？」

雅昭「学園都市の裏情報がぎっしり詰まったUSB」

雅之「これがあれば学園都市の秘密がわかる」

雅布「それで何する気？」

雅之「喧嘩や、いつか学園都市と喧嘩するんや」

雅布「それって戦争？」

雅之「に近いな」

雅布「マジかあ…」

雅之「そんな時はお前ら学園都市にあるものを全て捨てて学園都市から逃げろ」

雅布、雅昭「了解」

え？なんで外部の人間が学園都市に来てるかって？

雅之はこの時期に行われている自衛隊と警備員の合同演習のため、学園都市に来てます。

レベルアップアアアアア!!!!!!!!!!その? (後書き)

ゝその日の夜ゝ

雅布「なんで停電した?」

レベルアップアアアア!!!!!!その？

熊谷兄弟が教会の密会を終えた日、別の所

雅布「アレ？御坂さんに桜井に佐藤に初春？おまいら何してるんや？特に桜井、ハーレム気分になってんじゃない！」

桜井「別にそんな気分じゃないが…」

佐天「だから佐藤じゃない…佐天だよ」

御坂「ああ、熊谷くんこれから私たちショッピングに行くんだけど、今暇？」

雅布「ヒマですよ」

御坂「じゃあ行こう」

雅布「へへーい」

雅布は御坂達と「セブナイレブン」とい「セブンスミスト」に向かった。

佐天「でも『超能力者』かあ、スッゴイなあ」

雅布「レベル5？すごいよねえーアイツら、『1人で軍隊を壊滅』とか言うけど米軍とコンゴ軍では規模が違いすぎるんだよな」

桜井「まあ確かに…」

佐天「御坂さん『レベル5』なんですよ!!」

雅布「知ってる、調書を取った時に分かった『常盤台のおてんばお姉さん』てな」

御坂「ど…どこで」

雅布「あんな事件が起こったらそう思うわい、『立ち読みコンビニお姉さん』」

御坂「……………」

佐天「あゝ、『幻想御手』があつたらなあゝ」

初春「え？何ですかそれ？」

佐天「いや、あくまで噂だし、詳しい事はあたしも知らないんだけど…、あたし達の能力の強さを簡単に引き上げる道具があるんだって、それが『幻想御手』」

雅布（ああ、あるし）

雅布はポケットの中にある菊池から貰った「幻想御手」を触った。

佐天「ま、ネット上の都市伝説みたいなもんだけどさ」

初春「そりゃそうですよ、そんなのがあつたら苦労しません」

佐天「でもさ、本当にあるならあたしでも…」

初春「？佐天さん？」

佐天「アハハ：なんでもないよ」

雅布（既に噂が広まってる、菊池の言った事は案外早く来るかもな）

雅布は呑気にそんな事を考えていた。

御坂達が「セブンスミスト」に入る時、雅布はある人の視線を感じた。

見ると明らかに怪しい男がこつちをみていた。

どうやら初春と桜井を見ているようだった。

彼らは腕章を付けているから一発で風紀委員だとわかる。

（雅布は付けてない）

その風紀委員を見る目は完全に増悪の視線だった。

雅布（お巡りさ～ん、ここに変な人がいます）

・
・
・

佐天「へえ」『超電磁砲』ってゲームセンターのコインを飛ばしてるんですかあ」

御坂「そうよ、まあ50メートルも飛んだら溶けちゃうんだけどね」

雅布「今度から寛永通宝でやれよ、そうすれば『学園都市版女銭形平次』の出来上がりだ」

御坂「なにその注文…」

佐天「でも必殺技があるとカッコイイですよ〜」

御坂「必殺技って…」

佐天「あたしもインパクトのある能力欲しいなあ〜、お！」

佐天は店の商品であるヒモパンを持つと

佐天「初春、こんなのどうじゃ？」

初春「はい！？無理無理無理です！そんなの穿ける訳ないじゃないですか！」

佐天「これならあたしにスカートめくられても、堂々と周りに見せつけられるんじゃない？」

初春「見せないし、めくらないで下さいッ！！」

雅布「俺らどう見られてるの？こいつらいなかったら完全に俺達変態だよ」

桜井「荷物運びとしか思われてないんじゃない？」

雅布「なるほど…」

レベルアップアアアア!!!!!!その？

雅布は御坂達と一緒にいたら、いてもたってもいられない気持ちになったためその場から離れることにした。（桜井放置）

適当にそこら辺を歩いていると

雅布（あ、変態だ）

「セブンスミスト」の前で初春と桜井を凝視していた変態がいた。

彼は何かを考えているのか手袋にカエルのぬいぐるみを持っていた。

端からみたら不審者だ。

雅布は不審者を追うことにした。

通路にある看板や商品を見ながらその不審者を追う。

トイレの前の階段の所で御坂さんに会うが御坂さん気づかず

一度こつちを振り向いたが不審者の方を見ていたためこつちに気づかず。

すると不審者はまだ幼い子供にカエルのぬいぐるみをあげた。

幼い子供（女）は「お兄ちゃんありがとう！」って言って去っていった。

雅布はふと以前の爆発事件の事を思い出した。

「ぬいぐるみにスプーンを隠し入れて爆破」

不審者はスプーンを眺めながら「フッフ」と笑っている。

雅布「オイ！その挙動不審の男！聞きだい事がある！」

雅布は「風紀委員」の腕章を付けて迫る。

不審者「ヒィィ！！」

不審者が逃げ出した。

只でさえ「存在が怖い」と言われる雅布が威嚇してるのである。

不審者にどういう目で写ったのかは容易に想像できる。

不審者は窓から飛び降りた。

尚、2階のうえに下がゴミ集積場である。

雅布「面倒くせえな…」

雅布も続く

不審者は向こう側のビルとビルの谷間に逃げ込む

雅布もそれに続こうとしたその時！

【ドガァーン！】

突然「セブンスミスト」が爆発した。

雅布「!!!!」

雅布は立ち止まり、セブンスミストを見た。

通行人？「例の連続爆破テロだって！」

通行人？「逃げ遅れた人がまだ建物の中に入るらしいぞ！」

通行人？「風紀委員の子を見たって……」

通行人が口々に叫ぶ

しかし雅布はそれを無視し、再び不審者を追った。

雅布「待たんか!!」

そう雅布は叫んで捕まえた。

雅布「あの爆発、お前がやったんだろ？」

不審者「な……何の事だが僕にはさっぱり……」

雅布「今ここで正直に喋ったら命だけは助けてやろう、それとも自分の嘘を突き通すか？まあ『やってません』って言ったら一回白白剤を打たなければならぬけどね」

雅布は不審者を押し倒し、持ってるサバイバルナイフ（護身用）を不審者の喉元に突き刺しながらいった。

御坂「威力は大した物よね、でも残念、死傷者どころか誰一人かすり傷一つ負ってないわよ」

不審者「なっ！そんなバカな！！僕の最大出力だぞ！！」

雅布「ん？」

御坂「ほう…」

不審者「はっ！い…いやっ外から見てもすごい爆発だったんで、中の人はとても助からないんじゃないかと…」

そう言って不審者は後ろのバックからスプーンを取り出そうとした。

【ガシッ！】

不審者「うっ！！」

雅布「その手にあるスプーンは何だ？」

不審者「べ…別に何でも…」

雅布「汗が凄いぞお前、なんかやましい事隠しているんだろ？」

不審者「う…あ…」

御坂「こわ…」

雅布「暴れてもいいぜ、そしたらこのナイフがお前の頸動脈をズバッと切るだけだから」『公務執行妨害による過失死』だから非はお前にある。だから暴れても結構！むしろそのほうが調書とか取らずに済むから楽だ」

御坂「あなたちょっと何考えてるの…」

不審者「…いつもこうだ」

雅布「ん？」

不審者「いつも僕はこうして地面にねじ伏せられる！殺してやる！お前見たいに強い力を使う奴が悪いんだよ！力のある奴なんてのはみんなそうなんだろうが…！」

雅布「黙れ腰抜け…！」

不審者「ヒィ！」

雅布「何が『強い力』だ、俺は『風紀委員』っていう力を利用してただけだ！『風紀委員』っていう力が無ければ俺はお前と同じ腰抜けだ！そんなのは誰だって同じだ！『力』なんてのは自分で身に付けて守っていくものだ！無い奴は『力』を身に付けようとしなかっただけ！お前は『力を付ける努力』を怠っただけだ！だからお前は地面にねじ伏せられて当たり前！『力無き者』に与えられる者は何もない！」

不審者「でも僕には体力が無い…能力も無い…そんな奴に努力をしろ…！」

雅布「そうだ！何も無いからこそ努力をする！ある1人の人間がいた。そいつは野球が好きで好きでたまらなかったが親がキャッチボールを拒み、その子はロクにボールが投げられなかった…それが原因で野球に誘われず、デブで運動が出来ない『クズ』って言われた。しかしそいつは独学で野球を学び、自分流でフォームを作り上げた結果！送球とコントロールが上手くなり、『なんで野球部に入らないの？』まで言われるようになった。いいか！！下手くそや何も取り得が無い奴は作るんだよ！」

不審者「……………」

雅布「とりあえず詳しい事情は後でゆっくり聞こう」

不審者「でも僕には体力が無い…能力も無い…そんな奴に努力をしろと!?!」

雅布「そうだ！何も無いからこそ努力をする！ある1人の人間がいた。そいつは野球が好きで好きでたまらなかったが親がキャッチボールを拒み、その子はロクにボールが投げられなかった…それが原因で野球に誘われず、デブで運動が出来ない『クズ』って言われた。しかしそいつは独学で野球を学び、自分流でフォームを作り上げた結果！送球とコントロールが上手くなり、『なんで野球部に入らないの？』まで言われるようになった。」

レベルアップアアアア!!!!!!!!その? (後書き)

御坂「何か雅布のせいで出番が取られてる…」

白井「ですの…」

レベルアップアアアア!!!!!!その？

「セブンスミスト爆発事件」から一夜明けたある日の事

雅布「お！白井」

白井「あっ雅布」

雅布と白井はある公園で出会った。

雅布「御坂さんも」

御坂「あらっ雅布くん」

御坂さんも一緒だ。

白井「ちょうど良かったですわ、雅布、『連続爆破事件』の犯人は昨日捕まえた奴で合ってますの？」

雅布「は？」

御坂「え？」

白井「『書庫』の登録データでは容疑者の能力は『異能力判定』となってますの」

御坂「うそっ！？明らかに『大能力』クラスの破壊力だったわよ！？」

やっぱりあれはレベルアップバーか…

雅布

雅布は昨日不審者の持ち物にあった音楽プレーヤーの事を思い出した。

雅布「俺が暇な時調べてやるよ」

白井「ありがとうございます」

雅布「んじゃ」

雅布は白井達と別れると第177支部まで行った。

雅布「今日は個法先輩は研修でお休みのはずだ」

雅布はそう呟いて177支部に入った。

雅布はまず最初に白井のパソコンを起動させた。

白井のパソコンには「事件を起こした能力の規模と被疑者の能力の規模が違う」奴が入ってる。

雅布「もうこんなに入るんだ…」

雅布はそう呟いて自分のUSBにそのデータを入れた。

その後雅布はあるレストランに向かった。

【あるレストラン】

菊池「何のようだ？」

雅布「外に出たい」

・
・
・
・
・

雅布「あゝ、娑婆の空気は上手い！」

菊池「そんな犯罪者見たいな事言うなよ」

雅布「んじゃ、7時までに戻ってくるわ」

菊池「はいよ」

・
・
・
・
・

雅之「いきなり何のようだ？学園都市から飛び出して」

雅布「この音楽プレーヤーなんだけど…」

雅之に「レベルアップ」の入った音楽プレーヤーを渡す。

雅之「？何だこれ？」

雅布「レベルアップって言って自分の能力のレベルを上げる事が出来る」

雅之「ほう…」

レベルアップアアアアア!!!!!!!!!!その? (後書き)

どうやって外に出たか?

いつか書く!

雅布「オイ!」

レベルアップアアアア!!!!!!その？

雅之「なる程、要はこの『レベルアップ』の仕組みを調べて欲しいと」

雅布「もしできたら開発者の名前も分かるといいんだけど」

雅之「それは難しいな…」

雅布「俺も『風紀委員』の仕事として調べるからさ」

雅之「ならいいけど」

雅布「ありがとう」

雅之「しかしお前どうやって学園都市から出たんだ？」

雅布「今回は菊池のご協力のもとに【ピー、ピー】っていうわけ」

何故か擬音が入る。

雅之「なる程」

雅布「じゃ俺7時までに戻らないといけないから」

雅之「分かった、じゃあな」

・
・
・

菊池「お帰り」

雅布「ただいま」

菊池「娑婆の空気はどうだった？」

雅布「よかったよ、久々に秋葉原に足を延ばしたりしたから」

菊池「秋葉原行ったの？」

雅布「行った行った」

菊池「何か買った？」

雅布「鉱石ラジオ」

菊池「……………」

雅布「何か悪い？」

菊池「大量に売ってるよねそれ」

雅布「コレクションにしてる人もいるけど俺はちゃんとした通信手段に使うから」

菊池「え？」

レベルアップアアアア!!!!!!!!その? (後書き)

次回あの「露出魔」と出来たらアイツも出す予定

レベルアップアアアア!!!!!!その？

その日雅布は不意に起こった停電で「電力会社潰す！」と吠えてたが、白井からの電話で「一緒に病院まで来て」という連絡が来たため病院へ行った。

・
・
・
・

白井と御坂が病院の待合室で待機して雅布と桜井は飲み物買いに自販機へ行った。

白井「アツイ…」

御坂「ZZZZZZ」

【ガラ】

病室のドアが開いた。

白井「お姉様、終わった見たいですわよ」

御坂「んん…」

白井「起きてくださいなお姉様」

白井は御坂の事を起こそうとするが御坂は全く起きない。

白井「では…ここは一つ目覚めのキスで…」

【パーン!!】

御坂「いった!」

雅布「起きろゴラァ!!」

桜井「どんな起こし方だよ…」

雅布は途中で貰った病院のパンフレットを丸めて御坂の頭を叩いた。

白井「……………」

御坂「顔洗ってくるわね」

御坂は自分の頭を撫でながらトイレに行った。

???「君が担当の風紀委員かな?」

白井「はいですの」

???「待たせたね、一通りのデータ収集は完了した」

雅布「誰?あのオバハン?」ボソボソ

桜井「医者だよ医者、あとオバハンは失礼だぞ」ボソボソ

雅布「つつか何で俺らはここに來たの?誰か死んだの?」ボソボソ

桜井「何でも最近、倒れる学生が増えてるんだって」ボソボソ

雅布「へー、でアイツ誰？」ボソボソ

桜井「知らん」ボソボソ

???「それにしても…、暑いなここは…まるで蒸し風呂だな」

白井「ですわね…」

桜井「暑い上にさっき雅布が自販機でコーンポタージュ買って一気飲みなんかするから…暑い上に熱いよ」

雅布「途中から訳分かんなくなってるぞ」

オバハン看護婦「申し訳ありません、それが…、昨晚の落雷で送電線が断線してしましまして、自家発電による最低限の電力供給はあ
るのですが病棟や機器を優先しているものですから」

???「そうか、災害が原因では仕方ないな」

そんな時丁度良く御坂が帰ってきた。

???「全員揃った所で改めて自己紹介をしよう、私は木山春生、
大脳生理学を研究している。専攻はA I M拡散力場、能力者が無自
覚に周囲に放出している力の事だが…」

雅布「あの、そーゆー自慢話はマジいらないんで」

木山「そうか…」

白井「風紀委員の白井黒子です」

御坂「御坂美琴です」

桜井「桜井広です」

雅布「磯野勝男です」

白井・御坂・桜井（サザエさんだよそれ…、そんなつまらなさすぎて分かりやすいギャグじゃない…）

木山「ミサカ…、君が御坂美琴か」

御坂「私の事、ご存知ですか？」（っていうか雅布スルー？）

木山「ああ、『超能力者』ともなると有名人だからね」

白井「さっすがお姉様♪」

御坂・雅布「うっさい「黙れ死ね」…」

白井「……………」

医者「あの…それで何かわかったでしょうか？」

木山「今のところは何とも言えません、こちらで採取したデータを持ち帰って研究所で調査するつもりです」

医者「データならこちらから送る事もできましたのに、ご足労かけて申し訳ありません」

木山「いや、データだけではわからない生の情報もありますし、学生達の健康状態も気になったので」

白井「あの、お尋ねしたい事があるのですが」

・
・
・

木山「幻想御手？」

白井「はい、ネット上で広まっている噂なんですけど…」

木山「それはどういったシステムなんだ？」

白井「それはまだ…」

木山「形状は？どうやって使う？」

白井「わかりませんの」

木山「それでは何とも言えないな」

白井「ですわよね…」

そう白井が呟いていた時、いきなり木山は「暑い」と言っでは脱ぎだした。

御坂「うあ！」

白井「ちよっとなにやってるんですのー！……！……！」

木山「え…、だって暑いから…、それに別に恥ずかしくないし…」

白井「あなたはそれでも殿方の目がありますの！それに風紀委員として秩序を乱す行動は許しませんですの！！」

雅布「お前が言うな！」

レベルアップアアアア!!!!!!!!その? (後書き)

木山「ここで立ち話もなんだから涼しいクーラーの効いた場所に行くか」

レベルアップアアアア!!!!!!その？

5人はファミレスにいた。

御坂「アイスティー」

白井、雅布、桜井「同じく」

木山「アイスコーヒーを」

ウェイター「かしこまりました」

木山「さて、先程の話の続きだが」

雅布「はい」

木山「同程度の露出度でもなぜ水着はよくて下着はダメなのか」

雅布「それはですね、水着は海等で着るものでその意味は水で着る、水着なのでだ「違います！」ら…」

いきなり桜井らに話を遮られた雅布だった。

木山「アレ？」

御坂「話をまとめますと…」

遂に3-2で迎えた9回裏！2死満塁で中日は代打に立浪を繰り出す！対する阪神は我らが守護神！藤川球児！カウントはフルカウン

ト！藤川がモーションに入った！果たして結果は！？

木山「なる程、それで藤川が三振に仕留め、試合終了と」

御坂「いえそっちじゃなく」

木山「あー、つまりネット上で噂の『幻想御手』なるものがあり、君達はそれが昏睡した学生達に関係しているのではないかと、そう考えているわけだ」

白井「はい、上の方では学生に注意を呼びかけるという案も出たのですが、まだ实在の確認もとれてないうえ、情報の開示が『幻想御手』の被害を拡大する恐れもあるので、現段階では公表を見送り実態を調査するになりましたの」

木山「……ふむ、君達の仮定が正しいとするなら、妥当な判断と言える。能力の強さが簡単に上がるといった効能や、使用者が植物人間になるといった情報が一人歩きした日には、まとまるものもまとまらない」

木山はそういつて一息つくと…

木山「で、そんな話をなぜ私に？」

白井「能力を向上させるという事は、脳に干渉するシステムである可能性が高いと思われます。ですから…」

木山「『幻想御手』が見つかったら私にそれを調査して欲しいと」

白井「はい」

木山「構わんよ、むしろこちらから協力をお願いしたいくらいだ」

白井「ありがとうございます」

木山「ところで、さっきから気になってうたんだが」

木山が窓を指さすと、外には佐天と初春がいた。

木山「あの子達は知り合いかね？」

雅布「いや知りません」

・
・
・

窓から見て、左側に窓側から白井、初春、御坂、雅布

窓から見て、右側に窓側から桜井、佐天、木山

初春「へへ、脳の学者さんですかあ」

木山「よろしく」

初春「なぜそのような方とお茶を、白井さんの脳に何か問題が？」

雅布「元からだよ」

白井「『幻想御手』の件で相談してましたの!!」

その時、佐天が「ん？」と顔をして

佐天「『幻想御手』ですか？」

と言ったのを雅布は見逃さなかった。

白井「『幻想御手』の所有者を搜索して保護する事になると思われますの」

初春「なぜですか？」

白井「まだ調査中ですので、はっきりした事は言えませんが、使用者に副作用が出る可能性があること」

白井「そしてk「急激に力をつけた学生が、調子こいて暴れたりすると前回見たいな事になりかねんから」……」

途中で雅布が遮った。

初春「はー、？」

初春は明らかに挙動不審の佐天を見ると

初春「どうかしました？佐天さん」

佐天「えっ…やっ…別に…」

挙動不審で「幻想御手」をポケットに入れようとする、隣の木山の注文した飲み物に当たり、落下

佐天「ああ!？」

雅布「……………」

佐天「わゝ、すみません！」

木山「いや、気になくていい、かかったのはストッキングだけだから脱いでしまえば…」

と言ってまた脱ぐ

白井「だーかーらー人前で脱いじゃダメだと言ってますでしょーが！！」

木山「しかし…起状の乏しい私の肢体を見て劣情を催す男性がいるとは…」

白井「趣味嗜好は人それぞれですのっ！それに、殿方じゃなくても歪んだ情欲を抱く同性もいますのよ！」

雅布「おめえだろソレ！！」

佐天「女の人が公の場でパンツが見えるような事しちゃダメです！」

レベルアップアアアアア!!!!!!...!?!? (前書き)

祝! 21話!

雅布「単に書く量が少ないだけじゃないか」

シャラップ!

レベルアップアアアア!!!!!!その？

夕焼け空になった頃、雅布達は木山先生との会談も終わって帰宅しようとしてる。

白井「お忙しい中ありがとうございました」

木山「いや、こちらこそ色々迷惑をかけてすまない。教鞭をふるっていた頃を思い出して、楽しかったよ」

御坂「教師をなさってたんですか？」

木山「昔…ね」

そう言い残し、木山春生は去っていった。

御坂「なんつーか、ちょっと変わった感じの人よね」

雅布「アレはもう変人だよ」

白井「常人とは違う感性が天才を生むんですわ」

雅布「さりげなく変人扱いしてるなコイツ」

そう言い残し、雅布は白井達と別れた。

雅布は第177支部に着いた。

雅布（個法先輩は研修中でこの時間にはいない）

そう考えて第177支部に入ると…

誰もいなかった。

雅布はパソコンを起動した。

そして雅布はあるファイルを展開させた。

「大脳生理学」

そのファイルは学園都市内で「大脳生理学」を研究している学者をまとめた極秘資料である。

そのファイルから「木山春生」を探し出した雅布はさらにそのファイルを開くと

「音楽を使用した脳への干渉」

雅布「ビンゴ♪」

雅布は木山が昔書いたと思われる論文を発掘した。

雅布（音楽プレーヤーに入れて、それを聞くことにより能力が上がるという事は能に刺激を与える的な感じだと思う）

雅布はそのプリントをコピーして自分のポケットに入れた。

雅布（さあゝて、お次は…）

雅布は第177支部を後にすると、電話である奴を読んだ。

・
・
・

菊池「何のようだ？」

雅布「一緒に来てくれ、お前の力が必要だ」

菊池「ハイハイ」

そして…

不良？「あゝ！？『幻想御手』だどゝ？」

不良？「だったら10万持ってこい！10万！」

菊池「無理ですよ、そんな大金ありませんよ」

不良？「だったら親から金くすねてこんかい！」

現在、雅布と菊池は学園都市の路地裏で不良集団と対峙している。

目的は勿論、幻想御手の取引現場を抑えて逮捕する。

菊池「じゃあそうしますから先に商品をください！」

不良？「甘えんなあガキ！ガタガタ言わずに絞め殺すぞー！」

菊池「ヒィィ！そこをなんとかあ！」

雅布（もう恐喝の容疑で逮捕しようかな？）

ちよつと雅布はイラついていた。

菊池「僕の銀行口座あげますのでそれで何とか…」

菊池は自分の銀行口座のキャッシュカードを取り出した。

ちなみに菊池は3つの銀行の口座を作っているから問題ない。

不良に提出した口座の残高は0円である。

不良？「これまさか残高0円っていうオチじゃないよなあ？」

菊池「ギクッ！」

雅布
バレてるし…

不良？「お前さりげなく俺たちの事バカにしてるよねえ」

不良？「お仕置きだな」

菊池「え…、ちょ…、や…」

【ギャアアアアアアアアア！！】

【バタッ】

菊池「ふん、調子こくなクズが…」

不良2人は菊池を襲うとしたが、菊池は………で返り討ちに終わった。

雅布「さすがだね」

菊池「ハハハ」

雅布「さて…」

雅布は不良？の胸倉を掴むと

雅布「洗いざらい調べさせてもらおうよ」

レベルアップアアアア!!!!!!その? (後書き)

雅布「菊池が不良を倒すとき、『…………』っていうシーンがあったけどアレ何?」

虎之介「そのうち分かるよ」

雅布「そのうちって?」

虎之介「この『レベルアップ編』が終わったら次は『GUSHO編?』だから」

雅布「まだ続くのアレ!?!」

虎之介「続きますよ♪」

雅布「飽きないな」

虎之介「でもそこまでしか考えてないんだけど…」

雅布「マジか」

【次回予告!】

不良集団のアジトに來た雅布と菊池が大暴れ!!そして御坂達もレベルアップの真相を暴き出す!

レベルアップアアアアア！！！！！！！！！！その？

雅布と菊池は第10学区の路地裏にいた。

雅布「さて、目的の不良集団を探せばいいんだけど」

菊池「いいんだけど」

周りを見回しても

不良不良不良不良不良不良不良不良不良

雅布「どいつがどれだがわからない」

菊池「組織の名前聞いときゃよかつたな」

雅布「遅いわ」

そうこうして歩いていると

「あ
チンピラ？？」

二人のチンピラが迫ってきた。

菊池（敵か？）

菊池は身構えた。

しかし

雅布「あ！久しぶり！」

チンピラ？「久しぶりっすよー！！」

チンピラ？「あん時以来すね」

菊池「え？知り合い？」

読者は覚えているだろうか…、連載が始まった頃に御坂美琴を襲撃した二人のチンピラを…

チンピラ？「なにやってんすか？」

雅布「レベルアップの取り締まりだよ」

チンピラ？「へえ」

チンピラ？「どっか問題起こしたんですか？」

雅布「とっつかまえた野郎がレベルアップを大量に売っている組織の一員で、その組織を摘発したいんだけどアイツらロクに喋れない体になっちゃったから第10学区だって事しか分からなかった」

チンピラ？「そうなんすか」

チンピラ？「でもそうなると大変でっせ」

チンピラ？「何しろその『組織』は幾つも似たようなものがあるからそいつらがどこ所属なのかが分からないと話しになりませんよ」

雅布「そうなんだ」

雅布は「へえ」って顔をする。

チンピラ？「大変ですね『風紀委員』も」

雅布「うん」

チンピラ？「頑張ってください」

雅布「ありがとう」

そう言って雅布と菊池はチンピラと別れた。

菊池「だけど『その組織達』もレベルアップの取り引きしてるのは事実だろ？」

雅布「まあね」

菊池「どうするの？」

雅布「ダルいけど一つずつ潰すしかない」

菊池「マジかよ…」

雅布「だからお前の能力が必要なわけ」

菊池「ふうん」

こうして不良狩りをやること3時間

菊池「陽も暮れてきたし、完全下校時刻も迫ってる。今日はここま
ででいいんじゃない？」

雅布「じゃあ次で最後にしようか」

雅布はそう呑気に言う。

二人はビルの周りにぶらついている若者（不良）を奇襲し、リンチ
すると

雅布「お前どこのもんだあ？」

とてつもなく怖い表情を浮かべる。

不良「んだよテメエラ！何のようだよ！」

【ドカ！】

不良「グフウ…」

雅布「それは聞いてない、俺はお前がどこのスキルアウトの所属か
聞いているんです？」

菊池「疑問形？」

不良「貴様…不良狩りか！？」

雅布「いやただの風紀委員だ」

その後、その不良をボコボコにした雅布は、その不良に教えてもらった場所まで行った。

雅布「ここでいいのか？」

不良「はいそうです！」

雅布「間違いはないか？」

不良「ありません！」

雅布「よし、じゃあ死ね」

そう言うとき雅布は不良の首根っこを掴むと一気に…不良を投げた。

不良「ギャア！」

菊池「こいつ本当に中1？」

【バリーン】

ガラスの割れる音がした。

「なんだなんだ？」

「オイ！やられてるぞ！」

「どうした？誰にやられた？」

中から複数人の声がする。

雅布は近くにあったガラクタ（ゴミ箱）の物をテレポートさせた。

「ギャアア！」

「誰だあ！？」

すると中から三人くらい出てきた。

その瞬間

【ガリガリガリガリ】

突然、彼らの足元に氷が張り、三人は氷漬けになった。

【バリーン】

そして突然、その氷が爆発した。

菊池「雑魚に用は無い…」

菊池勇の能力「水質操作」である。

菊池は立て続けに氷を作り上げ、建物に投げていく。

「グハア！」

「ギャア！」

建物の中から悲鳴が聞こえる。

すると建物の中から

「死に晒せや！」

ライフル（AK47）を構えた人が窓から雅布を狙って…

【ダダダダダダダダダ】

撃った。

「グフウ…」

不良が窓から落ちた。

一歩早く、菊池の氷で作った弾丸が不良を貫いた。

ついでに雅布がAK47を拾った。

レベルアップアアアア!!!!!!その？

雅布と菊池は襲撃した不良の巣窟にいた。

菊池「商品がこんなにあるよ」

雅布「あるね」

彼らの目の前には、不良達が売ろうとした「幻想御手」が大量に放置されていた。

雅布「すんげえ量だな」

菊池「よしじゃあ全部頂きますか！」

菊池は近くから中トラを盗むと「幻想御手」を大量に荷台に載せた。

菊池「そういや死体はどうするの？」

雅布「ああ『アイテム』に全て任せた」

菊池「そうゆうことに使うの？」

雅布「そうゆうもんだろ？所詮アイツらは」

菊池は「そうかなあ」と呟きながら中トラを走らせた。

ちょうど同じ日

白井黒子が「幻想御手」の取引現場を抑え、ビル1つ倒壊させた。

レベルアップアアアア！！！！！！！！！その？（後書き）

絹旗「せっかく超久しぶりに出たと思ったのに…」

フレンダ「死体処理って何なのよ！」

絹旗「アイツら超私たちを軽蔑してるわね…」

麦野「無駄口叩かずささと運べえ！！」

二人「はい！！」

滝壺「大丈夫…、私はそんな二人を応援してる…」

レベルアップアアアア!!!!!!!!その? (前書き)

雅布「はいもしもし? あっ白井か、どうした? ……なに? 佐天が倒れた?」

レベルアップアアアア!!!!!!その？

雅布「で？佐天がぶっ倒れて初春が大泣きだと？」

白井「まあそうゆう事になりますわね」

現在、雅布は病院にいる。

何故かと言えば佐天涙子が「幻想御手」を使ったせいで倒れたと言
うのである。

まあそれで初春が泣きじゃくったり木山の所に行ったとか

雅布はそんな初春に嫌な予感がしたのか、菊池に「初春尾行しろ、
間違っても襲うな」と伝言を入れた。

但し、佐天死亡の連絡を受けた時、雅布が「うわっメンド…」と発
言し、白井を怒らせたのは別の話し。

白井「死んでないですよ!!」

雅布「何叫んでんの？」

御坂「黒子っ！」

御坂がやってきた。

御坂「佐天さんが倒れたって…」

雅布「遅かった…、後ちょっと早ければ…」

御坂「え…」

白井「だから死んでないって言ってんでしょうがああ！」

御坂「やっぱり『幻想御手』がらみ？」

白井「ええ、どうやらその線のようなのですの」

御坂「初春さんは？」

白井「木山先生の所へ」

御坂「そう…、でも少し休ませた方が…」

白井「わたくしもそう言ったのですが、自分が風邪で休んだせいで『幻想御手』への対処が遅れたんだと言って聞かないんですの」

御坂「あまり…無理しなきゃいいけど…」

雅布（不味いな…）「白井、そっちは任せた」

白井「はい？」

雅布は白井にそう伝言を残すとレポートでどっか行つた。

御坂・白井「……………」

？「ちょっといいかい？」

レベルアップアアアア！！！！！！！！！その？（後書き）

遂にクライマックスへ！！

レベルアップアアアア!!!!!!その？

雅布はレポートしながら木山春生が勤めてる病院へと向かった。

雅布（初春…）

別に雅布は初春に恋心を持っている訳ではなかった。

ただ…

雅布（木山を早く何とかせねば…）

急ぐ雅布

～その頃～

初春「すいません…、私のせいなんです…」

菊池（別にそうでもなくね？）

木山「あまり自分を責めるもんじゃない、少し休みなさいコーヒーでも淹れてこよう」

初春「そんな悠長な事をしてる場合じゃ…」

【ぽん】

木山が初春の肩を叩く

木山「お友達が目覚めた時に君が倒れていては元も子もないだろう？大丈夫、最後はきつと上手くいくさ」

そういつて木山は去って行く。

菊池（やっぱり雅布のデータ通り、木山が犯人かな？）

すると、菊池の持っていた携帯のバイブが鳴った。

雅布「菊池い！木山は？」

菊池「どっかいったが初春は無事だ」

雅布「そうか…」

菊池「で、どうした？」

雅布「お前には教えて無いけど、木山が犯人だ！！何故なら学園都市で大脳生理学やってるのは全部で5人しかいないが、全員今回の事件の分野とは違う！第一！木山には教師をやった頃、教え子達を実験に使われた過去がある！！」

菊池「アイツ教師やってたのか…、なんでそれが？」

雅布「詳しくは後で話す！とりあえず初春に危機が迫ったら何があろうとも救出！」

菊池「お前は今どこだ？」

雅布「大急ぎでそちらに向かつてる！」

菊池「OK」

そういつて菊池が電話を切った瞬間

木山「誰と喋ってたのかな？」

菊池「!!!？」

【ゴスッ】

菊池「ウッ…」

菊池は目の前が真っ暗になった。

レベルアップアアアアア！！！！！！！！！その？（後書き）

次回！

遂に雅布と木山が接触

木山「驚いたな、まさか君が…」

レベルアップアアアア!!!!!!その？

木山は菊池を気絶させると菊池の携帯を取り

木山「着信履歴…、熊谷雅布か…」

木山はそういつて携帯を元に戻した。

その後…

木山「ダメだなあゝ人の物を勝手に見ては」

雅布はテレポートの連続を使い、木山の病院に来た。

すると、病院の駐車場から一台の車が出た。

雅布がその車を見ると、木山と初春が乗っていて尚且つ、後部座席には菊池が寝ていたからであった。

雅布「マジかよ」

雅布は近くの路上に止めてあつたバイクを見た。

するとありがたい事にカギがかかったままだった。

急いで雅布は飛び乗ると、エンジンをかけて走った。

バイクの持ち主「俺のだぁ！泥棒！」

バイクの持ち主がそう叫ぶがお構いなしに行く。（ちなみに路上に200万円の封筒が置かれてたのは別の話し）

木山「まいったよ…、私の部屋は普段誰も立ち入れないようになってるし来客も殆どなかったからね、少々不用心だったな…」

菊池「何考えてるねかは知らんが、変な事考えない方がいいぜ」

目覚めた菊池はすぐ状況把握して木山にいう。

木山「お目覚め早速だが、いきなりその発言は何か意味があるのか？」

菊池「大有りだ」

木山は菊池の更に後ろの方をバックミラーで見ると、バイクをノーヘルで走らす1人の少年がいた。

木山「あれは雅布か？」

木山はそう言って、菊池は後ろを見る。

初春も後ろを見る。

初春「え？」

菊池「雅布だ…」

木山「多分…私の憶測だが…私が犯人だと突き止めたのは彼じゃないのか？」

菊池「そうだな…」

初春「ええ！？でも…、雅布は全く今回の事件の捜査には加わっていませんよ！？」

木山「それと菊池君、一つ聞くが熊谷とは…あの『熊谷』かね？」

菊池「……………」

初春「？」

木山「やっぱり言えないよな」

菊池「多分…合ってると思うぜ」

木山「分からないのか？」

菊池「本人に聞け」

菊池は木山にそう言うのと同時に後ろを指した。

するとあら不思議、雅布がバイクにギアをかけて猛スピードで迫ってくるではないか

木山・初春「!？」

菊池「初春伏せろ！」

【ガガン！】

【ギャギャギャ】

雅布のバイクは後部座席の窓ガラスに突撃し、窓ガラスは大破した。

雅布は僅かのタイミングを見つけて車の上に乗った。

木山「く…」

木山はシートベルトと身構えてたのとエアバックのおかげで無傷だ。

しかし初春と菊池は頭を打って気絶してる。

雅布「こんにちは」

木山「……………」

雅布「どうします?」

木山「何が？」

雅布「あなたの上には俺がいて」

警備員「木山春生だな!!」

雅布「前方には警備員がいる…さあどうする？」

木山「フ…」

木山は観念したのか車から降りて警備員の方へ向かった。

警備員「両手で頭の後ろに組んでその場でうつぶせになれ!!」

木山「ハイハイ」

木山はそう言って言われた通りにするが雅布は自前の拳銃に手をかけてセーフティを解除した。

警備員「木山は拳銃を携帯している模様、人質の少女と少年、突撃した風紀委員は無事です」

警備員「まったく勝手な事をやるなよなあ…」

愚痴をこぼすと

警備員「確保!!」

そう言って軽機関銃を所持した警備員の列がゆっくりと木山の所へ向かう。

【ザッザッザッザッ】

雅布は初春と菊池を回収する。（車のエンジン部分から煙が出て危ないため）

すると木山の目の色が変わった。

警備員の1人の軽機関銃がゆっくりと横を向く。

警備員？「へ？アレ？何で…？」

そして…

【ババババババババババババ！！】

軽機関銃の発射音が

そして…

警備員？「ギャア！」

警備員？「グワ！！」

他の警備員達がその警備員に向かって軽機関銃を向ける。

警備員？「!?!? 貴様一体何を…」

警備員？「ち…違う！オレの意志じゃない！銃が勝手に…」

警備員？「言い終わると同時に木山の手から気功波みたいなのが
出た。」

警備員？「な!?!?」

警備員？「バカな!?!? 学生じゃないのに能力者だと!?!?」

【ドオン!】

レベルアップアアアア!!!!!!その? (後書き)

雅布の所持している拳銃：陸上自衛隊仕様の9mm拳銃

警備員が所持している軽機関銃：MP5

虎之介「ちなみにMP5の意味は『五号軽機関銃』です」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4207x/>

とある科学の超電磁砲？

2011年12月18日15時46分発行